

## ●永井愛

5作の中では、『妄膜剥離』（川津羊太郎）が面白かった。ある男にまつわる伝聞、あるいは回想形式の語りから、様々な人々の人生の断片が引きずり出され、圧倒的な量感で堆積してゆく。そのほとんどは、陳腐で珍妙で、取るに足りない話だったりするのだが、それゆえに哀感を帯び、人間の営みを驚づかみにしたようなスケールすら感じさせる。

だが、多くの選考委員がためらったように、この語り口は作者が影響を受けた岡田利規氏の手法そのものだ。中身が違えば手法の酷似は不問にすべきか？ オリジナリティーとは何かという議論になった。

そして、この作品は受賞を逸したわけだが、それでよかったと私は思う。細部には独自の発展もあり、これだけに終わる人ではないはずだ。作者の今後に期待する。

『四畳半の翅音』（島田佳代）は、口蹄疫発生時の厳戒態勢から発想されたそうで、その印象は全編に漂うどんよりした空気として、うまく反映されている。「胸糸病」という着想は卓抜だし、四畳半に出入りする人物たちの日常的でありながら、どこか怪しげな振る舞いも、この先の展開を期待させた。

だが、途中からこの作品は母と姉弟の宿命的な悲話に比重が移り、「胸糸病」は背景に遠のいてしまったと感じた。中心人物の響子に能動的な行動がなく、ひたすら受け身であることも、劇の跳躍力を弱めたのではないだろうか。

とは言え、作者は「見えないものの怖さ」という現実社会から得た実感を、創作につなげようと試みた。最終候補作の中では、この作品が最も果敢に世界と向き合っていると思い、島田さんの受賞に賛成した。

## ●中島かずき

島田佳代さんの『四畳半の翅音』は、冒頭から、緊張感を持って読まされた。

謎の伝染病、胸糸病が蔓延しているため、隔離された町。その町の基幹産業カステラ工場で、実は胸糸病で死亡した患者を焼いている。しかもその灰が町には降ってくるという悪夢のような設定。

滅びが約束された町で静かに滅んでいくことを選ぶ人々の物語は、福島原発事故以降の東日本に住む人間にとっては、胸に響きすぎる。

しかし、この作品が九州で書かれた事にショックを受けた。せめて西日本は、こういう気分とは無縁でいて欲しいと願っていたからだ。

が、この作品は宮崎の口蹄疫騒動から着想したという著者の添え書きを読んで、改めて唸らされた。

正直、他県にすんでいる者にとって、畜産業を営んでいない者にとって、口蹄疫騒動はどこか他人事な気分だった。だが、同質の災厄は今日は我が身に降りかかる。わかっているようなふりをしながら、わかっていなかった自分を恥じた。

と、同時に、書き手の視点が鋭ければ、個的な問題も間違いなく普遍化されるということも改めて教えてくれた。

島田さんの作品は、昨年もノミネートされているが、去年の作品よりも遙かにいい作品を書かれている。

その成長も含めて、僕はこの作品を、大賞に推した。

鹿儿島の小さな町で、決して恵まれているとは言えない演劇環境の中で、踏みとどまり前に進む書き手がいることを、素直に喜び、祝福したいと思う。

選考会では、『四畳半の翅音』と並んで、川津羊太郎さんの『妄膜剥離』が大賞候補として議論された。

いくつも優れた点はあるが、その手法があまりにも先行作家に似すぎている点が、大賞作品としてふさわしいか疑問視された。

結果的に今回は見送りとなった。ただ、川津さんはこの作品が初めて書いた戯曲だという。だったら、書き続ける事で、自分の手法を掴んでいく事は十分に期待出来る。

是非、今後も応募して欲しい。

一年後に、成長した作品と出会える事は、選考委員の幸福でもある。

『四畳半の翅音』で、それを実感した。

来年、また、新しい刺激を受ける作品と出会える事を期待している。

## ●古城十忍

完成度の高さでは『妄膜剥離』が他を圧倒しているが、この作品には大きな障害があり、これをどう判断するかで授賞の行方は恐らく大きく変わる。そう思いながら選考会に臨んだ。

『妄膜剥離』は失明の危機にさらされながら試合のリングに上がるまでのボクサーの日々を描く。作者が「網」の字をわざわざ「妄」に変えているように、登場人物がボクサーのエピソードを「又聞き」であるかのように物語りながら、突然「俺」と一人称の語りが混在してきて、「物語というものの曖昧さ」、さらに言えば「真実というものの不確かさ」に肉薄することに成功している。イメージの繋ぎ方も鮮やかで、最後まで失速しない筆力もしたたかだ。だが、構成やセリフが岡田利規氏の『三月の5日間』にあまりに似ている。これが大きな障害なのだが、さて、これに目をつぶることができるのか。

1人2票を投じる第1回の投票では審査員全員が、この『妄膜剥離』と『四畳半の翅音』に入れたので、2本に絞ってさらに討議したが、やはり『妄膜剥離』をめぐる「オリジナリティとは何か」という議論に及んだ。それでもなおこの作品を受賞に推す声もあったが、私は作者の力を感じつつも、どうしても推せなかった。やはり戯曲というものは物語だけで成立するものではない。スタイルが借り物では劇作家の仕事の大半を放棄しているように思えてしまう。つまり、「戯曲とは何か」という根本のところまで格闘して初めて独自の世界観を獲得できるのだと思う。

『四畳半の翅音』の作者は昨年の作品に比べ、人間の内面に深く入り込もうとする覚悟が伺えて好感が持てる。社会問題化した題材（宮崎県に蔓延した口蹄疫）に着想を得て、新たな物語を立ち上げる姿勢もいい。何より、戯曲上にただならぬ空気感を出表できる力には並々ならぬものがある。ただ、後半に至るにつれて、ただならぬ空気感は家族愛の物語へと急速に縮んでいく印象が拭い得ない。最後まで「社会と格闘する人間」を描くことに挑んでいれば、くっきりと時代性を映した作品に仕上がったのではないか。その点がとにかく惜しい。それでも作者の昨年からの成長、今後への期待を込めて受賞作として推すことには異存はなかった。島田さん、おめでとう。

昨年同様、筆力がありながらももったいないと思うのは、『とてもいいバカンス』の作者である。ワンシチュエーションで場面を転がすことに専心するあまり、肝心の人間が浮かび上がってこない。この人が「人間の悪」を描いたらどうなるのか。それが見たい。

『ワレラワララー』は動物園を舞台に、動物のワララーと飼育係などの人間を出演者全員が一人二役で演じる設定になっているが、この一人二役のどこに演劇的な企みがあるのか見えてこない。その上、ワララーの家族と人間の家族、どちらも描き方は類型的で新鮮味がなく、どうしてもこれを書きたかったという作者の衝動が感じ取れなかった。『妄膜剥離』とは対照的に、戯曲の設定を生み出すことに四苦八苦し、半面、物語は平板。もっと作者独自の家族観を書くべきではなかったか。

『素敵じゃないか』は不妊治療を諦めるに至る夫婦と、出来ちゃった結婚に踏み切る若いカップルとを対照的に描いているが、これもまた表面をさらりとすくい取った「スケッチ」に終始している。

## ●松田正隆

『四畳半の翅音』が圧倒的に面白かった。

『四畳半の翅音』のなにが面白かったのか。私たちの住む世界における都市と地方の主従関係の陰湿な来歴がこの作品の背景に垣間見えるからかもしれない。この作品において私たちの世界の異様さはタルコフスキーの映画「ストーカー」のゾーンを思わせるD地区という設定やカステラ工場で死体を焼く煙突の煙という描写で可視化されている。弟の捜索に四畳半を訪れた響子はそこで弟の死体と対面する。四畳半はかつて母の暮らす場所（昭和臭のする部屋）でもあった。それは、テバイに戻り兄の埋葬を行うアンティゴネーを想起させる。

それにしても私たちニッポン人がこのような「四畳半」から逃れられたことがあったらどうか。巧妙に搾取するためにそのような母のいた場所を必要としたし、そこを利用して来たのである。田舎を軽蔑し憎悪ながらも田舎との「絆」を切れなかった。田舎だけではない。女性もそうで、母なるものを収奪の対象として利用してきたのであり、その抵抗の銃弾が響子からはなたれたとしても、それでも世界はゆらがないのである。なぜなら、従属しているかに見える地方（女性）の本音は都市（男性）からの支配への欲望だからである。「四畳半」自体が「四畳半」であり続けることを欲しているのである。というか、そのような物語を私たちが信じ込まされている、ということなのかもしれない。田舎に原子力施設があるのは都市の押しつけだけではない、田舎のほうだって求めていたのである。あるいは、いやいやって言うてはいるけど本当は女のほうも感じてるんだ、というのがほとんどの男性論理によるアダルトビデオのストーリーである。つまり、支配／被支配の関係が相互依存になっており、それはそれでうまくいっているんだからほっといてくれ、というわけなのだ。簡単に自民党的昭和が消えるわけがない。

それほどまでに「四畳半」への私たちのノスタルジーは根深い。その根深さと島田さんはガチで勝負した。彼女の感受したいびつな地方を被支配者側からの「虫」の視点で見事に描き、劇にした。こんな戯曲が東京や関西の男性作家に書けるわけがない。私もふくめ、彼らには四畳半の「翅音」などまったく聞こえないからだ。

『妄膜剥離』もかなり面白かった。私たちの見ている光景はほんの少しの網膜異常に左右されているのかもしれないという、世界へのまなざしの根柢の希薄さが世界を劇的に虚構化もし、劇的に陳腐化もし、さらに現実の人生の絶望へも追い込むということが、たった二人の演技と語りで可能であることが示された。

ただ、イワイさん（『妄膜剥離』中の登場人物）の救済願望劇のほうからもこの作品の世界観がひろがる余地があるように私には思われた。

## ●土田英生

「四畳半の翅音」を一番に推そうと決めていた。作者である島田さんのイメージが実に気味悪く伝わって来て借り物ではない表現を感じた。発病した人が処分されている場所がカステラ工場であったり、その病名が胸糸病と名付けられていたり、言葉やディディールにも狙っただけでは選べない確かなリアリティーを感じた。後半、響子の母親をめぐる蝶のくだりなどでは明らかに作者の温度が下がってしまい、物語を成立させる為に作った感じを与えてしまっているのがやや残念だった。

川津さんの「妄膜剥離」に関してはオリジナリティーとは何かということが問題になった。しかし冷静に考えてみれば、私たちは言葉を、文字を、そして演劇という表現形態を誰からから借りて来ている訳で、それとどこが違うのかと問われれば私には明確に線引き出来ない。さらに川津さんによって書かれている妄想には確かな手応えを感じるし、世界は網膜一枚に映っているものに過ぎず、私たちが自明であると信じている世界と妄想の中にある世界との曖昧さは読んでいてとてもスリリングだった。

川口さんの「すごくいいバカンス」は目の前の観客をどれだけ乗せられるかが勝負であると思う。コメディイとして観客を乗せるのは小さな笑いの連続でつながらず、おおきな軸で笑いを構築して行って欲しいと思う。彼にはその腕力があると信じている。

たじまさん、福田さんには自分にとって劇的であることを見つめて、自分の表現を追求して行って欲しいと願う。

賞とは誰かが誰かを評価することに他ならない。公平性を保とうとするには、「誰が」「どのようにして」「どのような作品」を評価したのかを明らかにして行く以外にないと思う。それによって劇作家は自らの立ち位置を決めることが可能になる。